思想戰講座　第二輯

思想戰と文藝

内閣情報部

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

一、本講座は思想戰に對する一般の認識を深めるための指導者用資料として發行するものである。

二、本稿は內閣情報部主催の下に昭和十五年二月二十三日から六日間に亙つて開かれた第三回思想戰講習會講義速記錄に加筆修正したものである。

昭和十五年五月二十三日

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

思想戰と文藝

内閣情報部參與　菊池寛

「思想戰と文藝」と云ふ題ですが、これは非常にむづかしい題であつて、私は不得手なので、「日本の武士道」と云ふ話ならすると申上げました。所が、題はそれにして置いて武士道と云ふ事を話せと云ふことなので、兎に角御話しまして、時間が餘りましたら後で日本の武士道に就いて感じた事を申上げ様と思ひます。

先づ文藝と云ふものはどう云ふものかと云ふ事を先に申上げ、次に文藝と思想との關係はどう云ふものかと云ふ事を御話致します。文藝は皆様御承知の通り藝術の一つでありまして、昔ギリシヤで藝術を司るミューズと云ふ神様が一人で無く七人居つたので、其の時代から藝術が七つに分かれたと云ふ事になつたのであります。文藝は其の一つでギリシヤ時代には小説はなくて、敍事詩や芝居などが文藝の中に入つて居たのであります。それで小説と云ふものは近代に發達したものでありまして、文藝の中では一番末ッ子であります。

さて藝術と思想とは關係があるかと云ふと、根本的には關係が無いのであります。皆さんも御存知の通り音樂と云ふものは、藝術の中で一番純粋に藝術的なものだと言はれて居ります。所が音樂には思想があるかと云ふと、無いのであります。音樂にはテーマはある、譬へば葬送曲（funeral march）と云ふものは葬ひの悲しみの歌でありますが、明治の初期には音樂が分らないものですから、それを結婚式の時にやつたと云ふ話があります（笑聲）。またベート

ベンの月光の曲(moon light sonata)は、夜の月の淸らかさ等を歌つて居るのですが、これらのものには思想は少しも無いのであります。一番藝術的な音樂が思想と關係が無いと云ふ事は、直ぐ皆樣も分ることであります。繪畫なども矢張り思想がないと思ひます。繪には形だとか色の美しさはありますが、思想があるかと云ふと殆ど無いと云つても宜いと思ふのであります。此の頃事變關係で橋本關雪なんか『軍馬』と云ふ樣な題を附けまして、軍馬と兵隊との關係が一體して居ると云ふ事を畫いて居りますが、思想と云ふ所まで行つて居ないと思ひます。楠正成の繪は勤王思想を鼓吹すると云ふのですが、楠正成の繪を畫くと云ふだけの氣持が思想的なのでありまして、繪その物の中にはさう云ふ思想は現れて居ないのぢやないかと思ひます。さうして又或る人物を畫きまして、その人の思想がそこに出て居るかと云ふとこれもむづかしいと思ふのであります。其の人の人間的の善さとか敎養とか、さう云ふものは顏、形に出ますけれども、それ以上のものは出ないのぢやないかと思ふのであります。卽ち音樂、繪畫など一番根本的な藝術と云ふものと思想とは關係が無いのであります。

ところが文藝になりますと非常に思想が入つて來て居ります。それから二十世紀に發達しました映畫——此の頃第八藝術と云つて居る、昔の七藝術に對して新らしい 近代的に起つた藝術と云ふ 意味で第八藝術と 言つて居りますが——文藝とか映畫 殊に小說で近代になつて 發達したものには、思想と云ふものが可成り加味されて居ると云ふことは爭へない事實であります。小說と云ふものは人生の一角を書くものであります。人生の一角を書く爲には人間を書く、それで人間の思想と云ふものが作品の中に出て來ると云ふことは當然のことでありまして、映畫に至りましては映畫に出て來る人間が思想的の演劇をやるのであります。卽ち前に述べました通り藝術の中で一番藝術的なものは思想とは何の關係もない。ところが近代に發達した小說とか、映畫と云ふ樣なものは思想と云ふものが可成り重要な役を勤めて居ることは爭へないことで、其の意味で昔の文藝には思想的なものは餘りないのであります。

近代になりまして文藝の中に思想を盛る、社會の改善に對する思想だとか社會の革命に對する思想と云ふ樣なものを盛ると云ふ傾向が出て來たのであります。併し本來の藝術と云ふものは思想と關係が無い。無いのが藝術の姿ですからさう云ふ意味で思想と關係を持つて居るもの、思想文藝と云ふものは藝術の中で一段下へ下る。此の藝術と云ふものは矢張り政治だとか道德とか法律とか思想とか、さう云ふものと同じ樣に直接に此の人生を善くする力があるのぢやないかと思ふ。人生には政治、道德、思想、藝術と云ふものが各々働き掛けて居るのでありまして、皆を善くする爲に働いて居るのぢやないかと思ふ。藝術が人生に役立つ、譬へば皆さん方が本當によい繪を見た時の感じは、心が澄渡る樣な氣がするし、又本當に良い芝居を見た時にもそんな感じがしやしないかと思ふ。それを見て居ると非常に心が淨化する、心が非常に澄切つた樣になる。人生の本當の姿を見、運命の姿を見た樣な氣がして心が淨化され、非常に人生に對する考へが淸らかになる。人生に對して活動力が殖える。之をギリシャのアリストテレスは演劇を見る利益に數へて居ります。演藝を見て感銘に打たれ、人間がさう云ふ氣持で人生に對すると云ふことは、是は確かに人生を善くするんぢやないかと考へます。其の意味で人生に對する直接の效果があるのが藝術の價値だと思ふ。

所が此の藝術の力を他のものに役立たせようとする、政治だとか思想とかさう云ふものを廣めるに役立てようとしますと、忽ち藝術の力が薄れる。昔中世紀にキリスト敎を頒布する爲に文藝の力を使つた。結局文藝がキリスト敎の御用文學となり、其の時代の文藝は墮落して仕舞ひました。其の時の言葉でペガサス・イン・ザ・プラウ(Pegasus in the

plow）と云つてキリスト教の御用文學を批評して居るのであります。それは藝術と云ふものを實用的なものに使つた爲に、非常な不調和が出來まして藝術なるものの品位が墮ちた。さうして藝術其のものは、墮落したのであります。然し、社會の改良發達を希望する人は矢張り此の藝術を使つて自分の思想を傳へようと云ふ樣な場合になるのは已むを得ない事でありまして、十九世紀以後になりますと藝術の中に思想を盛つた作家が澤山あります。イプセンと云ふ人はドラマ・オブ・アイデアス（drama of ideas）といつて色々な思想を戯曲に盛つた譯でありますが、其の中でノラと云ふ樣な芝居があります。婦人開放の思想を盛つた芝居で思想文藝と言はれて居ります。それから日本へも來たことのあります英國のバーナード・ショーは、先の歐洲大戰の時も今度も皮肉を言つて居りますが、彼も亦芝居と云ふものは、社會改革と云ふ樣なものに使つてこそ値打があるのだと主張して、社會に對する自分の思想を盛んに芝居に書いて居ります。ショーの戯曲は色々自分の考へを目茶苦茶に書いてありますが、それでも未だ言ひ足りないものですから、彼の戯曲にはどれも長い序文が附いて居ります。そこでまた自分の思想を盛んに述べて居る。彼は思想文藝の大家と言つても宜い樣な人で、文藝と思想を一緒にさせて居ります。

併し、思想文藝の一番の缺點は何か、それは政治とか社會改革とかに役立てさせるからであります。從つて時にはどうしても品が下つて仕舞ふ。どうしても御用文學と云ふ事になりますと直ぐに品が下つて仕舞ふのでありまして、それと同時に思想と云ふものはどう云ふ思想でも古くなつて仕舞ふ。イプセンの思想は新らしかつたんですけれども、今では誰でも知つてゐる。ショーの思想なんかも非常に新らしいものでありましたが、十年後になると非常に古臭くなつて誰でも常識の樣に考へる。結局自分の思想を一般大衆化して常識化するに役立つと云ふので、G・K・チエスター

トンが「ショーは、自分の思想を常識化する爲に働いて居る樣なものだ。彼の思想は最初は非常に珍しかつたのだが、皆それを知つて仕舞ふと一般の常識化して仕舞ふ、その爲に働いたのだ」と云ふ樣に批評して居るのであります。

以上申上げましたやうに、思想文藝と云ふものは非常に生命の短いものですから、文藝の本質と思想と云ふものとは關係が無いと云ふことは明らかであります。藝術の本質と云ふものはアート・イズ・エッキスプレッション（art is expression）と云ふ表現にあるのであります。人間が自分の感じを表現する處に藝術の本質があるのであります。芭蕉の俳句に

名月や池をめぐりて夜もすがら

といふ名句の一つがありますが、月が良いんで夜通し池のぐるりを歩き廻つたといふのです。これは誰でも感じる事なのですが、文章になると忽ち其處で芭蕉の俳句と云ふ藝術が成立するのですから、其處に持つて居るテーマ（題材）は平凡なんですが、精妙に言ひ現す所に芭蕉の藝術が存在するのであります。去來の句に

應々といへど敲くや雪の門

といふのがありますが、今起きる今起きると返事をして居るのですが、向ふには聞えないでドン〳〵戸を叩く、雪の夜の景色が可成り良く出て居る名句の一つであります。さうして見ると、それを言ひ表す所に強い藝術的力が出て居るのであります。實朝の歌に

物いはぬ四方のけだものすらだにも哀れなるかなや親の子をおもふ

と云ふのがあります。是なども何でも無いけだものでも親が子を可愛がる、斯う云ふ表現になりますと、此處に強い

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

矢張り藝術的な感銘が出て來る。是は歌でも俳句でも同じでありまして、丁度コロンブスの卵の樣なもので、それに對する立派な表現を見付ける、たつた一つしか無い二つと無い表現を見付けると云ふ事が、此の藝術の本體ぢやないかと私は思ふのであります。

併し表現と云ふことは唯言ひ表し方かと云ふと、さうではない。文藝と云ふものは人生の一角を見て、それを表現することでありまして、藝術家でないと物が見えない。畫家なんかは到る處に美を見出す、我々が見出し得ない所に美を見る、例へば、臺所の塵箱に魚の骨や野菜の屑等普通の人が顔を顰める樣なものを捕へて美しい繪にして仕舞ふ。物を見付ける眼と云ふものが、表現の中の六七割までを占めて居るのであつて、後の三四割が實に仔細に書いたり寫したりするものであります。表現と云ふことは普通に考へて居る樣なものでなく、矢張り物を摑んでそれを書き出すと云ふ所が藝術的の表現の全體の活動だと思ふのであります。そこに藝術の本質があり、また文藝の本質があるのであります。從つて思想と云ふことと文藝と云ふこととは何の關係も無いのであります。只人生の一角を摑む爲に、思想が其のまゝ人生の一角として藝術の中に表れて來るのは仕方が無いのであります。然し思想を宣傳する爲に文藝を使ふといふことになりますと、文藝と云ふものは第二流のものになつて仕舞ふ。

御承知の通り我が國には大正十年頃からプロレタリア文藝と云ふものがありました。是は矢張り社會主義乃至共產主義の思想であつたのですが、其の時は今迄の我々の文藝はブルジョア文藝と云ふ名前で排斥されました。その當時私なんかも『文藝春秋』を出しましたのは、矢張りプロレタリア文藝に對抗する爲もありました。プロレタリア文藝は本當の一流の文藝ではない、思想を宣傳する爲の文藝だから嘘が出て來る、自分の思想を尊いと思ふから、其の思想を宣傳しようとすればどうしても嘘が出て來るのであります。プロレタリア文藝の缺點は何かと云ふと、それは資本家の横暴を懲して勞働者の立場を辯護するのですから、プロレタリア文藝に出て來る資本家は皆惡玉だ、勞働者は皆善玉だ、皆資本家は惡人になつて勞働者は善人になるといふことにあるのであります。然し、是は人生の眞實と云ふ點から言へば嘘なんであります。これは昔の芝居にも例がありまして、昔の芝居は懲惡と云ふことが主でありますから、芝居に出て來る趣意は惡人滅びて善人榮えると云ふことになります。さうしますと人間を惡人と善人とにはつきり分けて、善人は何處までも善人、惡人は飽くまで惡人であつて、人生の眞實と違つて居るのであります。人生の嘘を書いては本當の文藝とは言へないのであります。

明治四十年頃に日本に自然主義と云ふことが流行して來ました。是は思想的には善くも惡くもないのでありまして人生の眞實を書かうと云ふのが本來の目的で、在りの儘の生活を書かう、在りの儘を書くのには、今まで在りの儘に書かれて居らないのを書くのが一番其の主義を宣傳するのに良いのですから、人間の性慾的な方面を在りの儘に書くと云ふことを、主義を實行する爲にやつたのであります。それで自然主義文藝は性慾文學だと云ふ樣な誤解を受けました。本當に物を書くと云ふのは文藝的の可成り根本的な要素の一つなんでありまして、嘘を書くと云ふことは文藝として一つの墮落なんであります。プロレタリア文藝の樣に自分の思想を宣傳しようとしますと、自分に都合の良い樣に書かなければいけない、勞働者は惡人、資本家は善人と書くと都合が惡い、資本家は皆惡玉で勞働者は皆善玉になる樣なことで、私共は其の嘘を攻擊したのであります。文藝の要素には階級とかそんなものはない、藝術的至上主義と云ふ樣なものでプロレタリア文藝と戰つたのであります。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

以上のやうに文藝と思想と云ふものは根本的に殆ど關係がないんでありますが、それでは文藝と云ふものは人生の爲に圖らないのか、若くは國家の爲に圖らないのかと云ふことになりますが、さう云ふことには決して無關心ではないのであります。非常時に民族の興廢が分れて居ると云ふ樣な時には、文藝がさう云ふ方面に力を注ぐのは當然なことであります。併し矢張り先にも申上げた通り文藝は善い作品を書くことによつて、矢張り大衆の氣持だとか、人生に對する元氣とか、人生を闘ひ拔く力とか、又は時局に堪へる力と云ふ樣なものが養はれると云ふのではないかと思ふのであります。良い音樂を廣く民衆に聽かせると云ふことで、矢張りどんな難局にでも堪え得ると云ふ樣な力が養はれるんぢやないかと思ふのであります。何かの御用を勤めさせる、所謂御用文學になりますと文藝の本來の意義や氣品が落ちて來る。文藝の力もなくなつて來るのです。

それなら本當の愛國文藝といふやうなものは存在しないかと云ふと、是は存在して居るのであります。それは作る人自身が本當に御用だとかいふやうな氣持で無く自分自身が愛國者になり、勤王家になつて居る場合でありまして、維新の志士が勤王和歌と云ふ樣なものを書く、書く人自身が御用を勤めるといふやうな意識がなくて、本當の情熱、純粹無垢な情熱が出る場合には、愛國文學、御用文學でない本當の立派な文學が出來るんぢやないかと思ふのであります。思想文學であり乍ら第一流の文學としての條件は、良く思想を傳へ、而も文藝の作品として立派な姿を持つて居る、思想を有つて居る人間が本當に良く書けて居る事であります。其處に思想を有つて居る、行動して居る人間が本當の人間の姿として書けて居るかどうか、それが一流の文學であるかないかと云ふ立派な一つの試金石になつて來るのであります。イプセンの思想を有つて芝居の中に活躍してゐる人間が本當の人間であるか活きた人間であるか、人生に活きて居る人間であるか、本當に書けて居るかどうかと云ふことが、イプセンの文藝が永久に殘るか殘らないかの境目になるのぢやないかと思ふのであります。大正十年以來旺盛を極めましたプロレタリア文藝が結局物にならなかつたと云ふことは、本當の文藝家が居なかつたと云ふことぢやないかと思ふのであります。さう云ふプロレタリア思想を有つて居る人間が本當の姿で書けて居たならば、プロレタリア運動が無くなつても作品として殘つて居る可能性がある。本當に人間が書けて居なかつた、人生の一角を掴んで居なかつたと云ふ缺點の爲に、あゝ云ふ社會運動が無くなると同時にプロレタリア文藝も全然滅亡して仕舞つたのぢやないかと私は思ふのであります。

文藝と思想と云ふものは根本的には殆ど何も關係が無いけれども、思想戰なんかにも文藝的の力を旨く使用されると可成り效果がある。思想文藝が第一流の文藝でなく第二流の文藝であるにしましても、此の思想が文藝的な表現方法によりますと相當人心を動かすことは爭へない、日本でも其の實例があります。賴山陽の「日本外史」は歷史的な價値としては「大日本史」なんかよりづつと劣つて居り、史實なんかも正確でないのですが、文章が名文の爲に維新の勤王の志士を可成り鼓吹したことは確かなことであります。それは矢張り此の山陽の文學的の力、表現だけの問題でありまして、同じ位の思想を有つて居る人が居てもあれ程の文章の書ける人でなければあの樣な效果を勤王運動の上に殘すことは出來なかつたと思ふのであります。賴山陽の名文の爲に勤王の志士は多くは外史を讀み、大日本史を讀んだ人は餘りないと思ひます。大日本史は日本の國體の尊嚴を高唱致しまして大義名分を明らかにした不朽の史書でありますが、あれは部數も澤山ありますし、直接讀んだ人は少數でありませう。外史は非常に手輕であつて、御存知の通り名文でありましたから、あれが勤王倒幕の思想戰に可成り有力な活動をしたと云ふことは爭へないと思ふのでありま

アジア歴史資料センター

す。

是から先の思想戰に於ても、私なんかの觀察では國家に害のある樣な思想文藝は當分興らないのぢやないかと考へて居ります。さうした文藝の本當に良く分つて居る人は、國家に害のある樣な文藝が思想文藝として表れた場合には、藝術至上主義と云ふ立場から言つても、それを幾らでも押へ付けることが出來るのでありまして、さう云ふ點で私は文藝の思想戰と云ふ樣なことに對しては、將來とも大した心配はなさらなくても良いのぢやないかと思ふのであります。それと同時に國家が文藝の本當の使命を良く了解して下さつて欲しいのであります。國家が藝術と云ふものを本當に尊重すると云ふことは、結局國民の思想や國民の元氣や民族的な關心と云ふものを强めることでありまして、藝術其のものはそれ自身の目的を達せしむることによつて人生なり國家なりに相當大きな貢獻があるのぢやないかと思ふのであります。併し日本の國家は今の所では美術とか音樂なんかは尊重して、明治以來音樂學校が出來たり、美術學校が出來たり中々盛んですが、いざ國家が思想戰を行ふと云ふ樣な時には結局其の國家に思想戰なんかで奉仕出來るのは文藝でありまして、日本畫の大家がポスターを畫いても人々が驚くばかりで(笑聲)、大して效驗が無いのぢやないかと思ひます。明治以來政治家が美術を保護したと云ふのは結局自分があゝ云ふ繪畫きに一枚畫かして藏つて置かう(笑聲)と云ふ骨董道樂から起つたんぢやないかと思ふのであります(笑聲)。さう云ふ點で矢張り文藝と云ふものは先程申した通り思想的の題材、思想と關係ある點が非常に深いのでありますから、その點で國家が文藝に對して相當深い關心を持ち、文藝が國家に生き甲斐のある樣に奬勵し、さうして惡思想に乘ぜられるチャンスを未然に防ぐと云ふことは、將來の國策上からもかなり重要な事ぢやないかと思ひます。

十二時近くになりましたので、次に簡單に日本武士道についてお話申上げます。日本の武士道で一番の特色は身代りとか、殉死と云ふ樣なことではないかと思ふのであります。昔尊貴な方が死なれた時に侍臣を無理に埋めた、それを武內宿禰が可哀相に思つて埴輪を造つて代りにしたと云ふのは嘘で、日本の歷史を讀んで見まして自發的に　天子樣の爲に殉死した樣な人はありますが、强制的に死なされた樣なことは歷史には殆ど見えないのであります。戰國時代になりますと大名が死ぬ時には殉死が澤山ある、松島の瑞巖寺を御覽になつた方は御存じでせうが、政宗の家來が十五人彼の死んだ時自發的に殉死して居ります。三代將軍家光が死んだ時には五六万石の大名が三人ばかり殉死しました。一人は佐倉宗五郎の騷動で有名な堀田正盛で、城中で死んだと云ふ知らせがありますと直ぐ切腹して仕舞ひ、潔いと云ふので非常に褒められました。內田信義と云ふ人は親類緣者を招いて酒盛をし「十時が來たら起して呉れ」と云つて寢たのですが、十時が來たが皆は起したら直ぐ切腹すると思ふから十二時頃起しました、さうすると「何故もつと早く起さんか」とぶつ〳〵言ひ乍ら切腹したと云ひます(笑聲)。もう一つの特色は、日本の武士が名を惜んだといふことであります。源平の合戰で誰が一番勇しいかと云ふと畠山重忠とか梶原景季だとか色々ありますが、私は無官大夫敦盛だと思つて居ります。彼は一の谷から味方の軍船目指して海の中へ馬を乘入れると其處へ熊谷直實が來て「武士が敵に後を見せ給ふは卑怯ぢやないか」と呼んだ。其の時敦盛は僅か十六の少年で、源氏の軍勢が海岸に充ち滿ちて居るにも拘らず單騎引返したその意氣は、實に源平のどんな勇士にも劣らない勇氣だと思ふのであります。節操を尊ぶ氣持は、名譽を重んずる氣持から來て居りまして不義のことはしないのであります。また後藤又兵衛が大阪の役で德川家康が「十万石やるから味方しろ」と言つたら「嫌だ」と言つた。「播磨一國をやるから」と言つた。是は後藤としては

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

非常な出世なんですが、併し矢張り拒絶した。彼は「今大阪方は勢ひが盛んで徳川方が負け戰になつて居るなら考へようが、大阪方が命旦夕に迫つて居る時に武士として背くことは出來ない」と誘惑を拒絶して居ります。斯う云ふことは日本の武士道の精華ぢやないかと私は思ふのです。斯う云ふ事をやる根本的な思想は何であるかと云ふと、それは矢張り死を怖れないと云ふ事であります。

それについて鍋島藩の有名な『葉隱論語』と云ふ本に良い事が書いてあります。上中下三卷になつて居りますが、良いと思はれる點は二、三頁です。其の良さは他のどんな本を讀んでも見付からないと思ひます。本當に金剛石の樣に光つて居ります。

「武士道と云ふは死ぬこととと見付けたり」

實に立派な言葉ではありませんか。

是は實に良い言葉でありまして、こんな立派な表現はないと思ふのであります。身代りとか殉死とか名譽を重んずるとか、これは結局死ぬと云ふ一種の覺悟がなければ出來ないのであります。葉隱の二つ一つの場合には死ぬ方に片付けろ、生きて腰拔と言はれるより逸まつて死んで犬死と言はれる方が良い、二つ一つの場合には早く死んだ方が立派だ、といふのがそれであります。

之を實行に移した方は前の上海戰の空閑少佐であります。意識不明で敵に捕はれ、敵に士官學校時代に世話した軍人が居て親切に世話して日本軍の方へ送り返して呉れたのです。其の時少佐には生きるか死ぬかの二つの考へがあつたと思ひます。捕はれた時は意識不明で不可抗力であつた、だから、生きようと思へば生きられると云ふ考へと、敵の手に捕へられたと云ふ事は恥であると云ふ考へと、此の二つ一つの場合に死ぬ方に片付けられたと云ふのぢやないかと思ふのであります。あの時に空閑少佐が生きて居つたら今度の事變なんかで活躍されるだらうと思ひますが、死んだからこそ國民に與へる教訓は生きて居られるよりも十倍百倍の力があると思ふのであります。少佐が葉隱の言葉を應用されたのは當然でありまして、あの方は佐賀縣出身の方で咄嗟の場合に唯死ぬ方に片付けられたのぢやないかと思ひます。

日本の國民が是からの難局に處して何時でも死ぬ覺悟を十分にして居ると云ふことは、國民の一番大事な事ぢやないかと思ふのであります。武藝なんかもさうでありまして、宮本武藏が始めて細川忠利の所に目見得をしました時、「玄關から此處へ來る間に俺の家來で誰が目に留つたか」と尋ねられました。「一人あります」「それを連れて來い」と言はれて武藏が連れて來たのは輕輩で都甲太兵衛と云ふ男でありました。「此の男が本當の武士なのか」と言つて色々聞きますと、殿樣の御尋ねですから到頭お終ひに「六七年前から据物になつた積りで居ります」といふことを言ひました。据物とは試し斬りになる罪人で殺されるに決つてゐたのです。「武士と云ふものは何時でも命を捨てる、何時でも殺される覺悟をして居なければいけない、最近になつてやつと其の心境を獲得しました」と言つたのであります。武藏が「あれが本當の武道であります」と云ふ樣な事を言ひました。

武道と武士道は結局同じものでありますが、禪宗の悟りなんと云ふものも矢張り此の死を覺悟すると云ふ事が七分位までさうぢやないかと思ひます。禪の覺悟と武士道の覺悟は似て居ると思ひます。「色卽是空空卽是色」と云ふ言葉がありますが、葉隱には、この言葉を說明して「何も無き所に居るが色卽是空、何も無き所に居て萬事を備へたる空卽

是色」と言つて居りますが、禪の本義卽ち武士道の本義を實に簡單明瞭に說明して居ると思ひます。一死を覺悟してゐて、人間としての義務を十分に盡すと云ふ樣な心境は、我々が必らず參考にして良いんぢやないかと私は考へるのであります。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp